

はじめに一閨情と閨怨、本発表の課題一

「閨情」とは、文字に即した原義としては女性の男性に対する情である。その表現の実態に即していえば閨情を表す姿態・動作・雰囲気等の表現である。「閨情」が詩作品の系譜として確立したのは、『芸文類聚』においてである。その卷三十二人部に「閨情」の部立てがあり、多数の閨情の詩を収める。

「閨怨」は、広くは女性の悲しみの意。「閨」は婦人の部屋、また婦人の意。漢語の「怨」は、日本語よりも広く悲哀・憂愁の意味を持つ。

「閨怨詩」は、近藤春雄『中国学芸大事典』(大修館、一九七八)の定義では「女子の怨恨悲哀を詠じた詩」とされている。閨怨詩の最も広い意味として妥当。

「閨怨詩」はさまざまな女の悲しみを歌う。君主の寵愛を得られない、あるいは君主の愛を失った宮女の悲しみ(所謂「宮怨」)。妓女が、去ったまま帰らぬ男を思つての悲哀(「妓女怨」)、あるいは遠征に出て帰らぬ夫を思う妻の悲しみ(「征婦怨」)、これらが「閨怨」の主な内容。

「閨怨詩」のジャンルは六朝・陳の徐陵編『玉台新詠』で確立した。『玉台新詠』には、「閨怨」や「春閨情」「秋閨怨」、「春怨」「玉階怨」といったタイトルの作品が、総数六百数十首中、四十首近く収載されている。

広義の閨怨詩の淵源は『詩経』にあり、漢の「古詩十九首」あたりで、芸術的に高いレベルに達した。そして、『玉台新詠』において、閨怨詩はジャンルとしてははっきりと中国文学の中に一席を占める。

この『玉台新詠』に閨怨として収載する作を基準とすれば、閨怨詩は、一、「女子の怨恨・悲哀を詠じた詩」という以外に、二、「艶」即ち何らかの美的雰囲気や情感を有すること、悲しむ女の色っぽさやしぐさ、心根の愛らしさ等が表現されていることが閨怨詩たることの条件になる。徐陵『玉台新詠序』に「艶歌を撰録して、凡そ十巻と為す」とある、この編集方針が『玉台新詠』の閨怨詩の内容と表現を決定している。

「閨怨」はその字義からして「閨情」に含まれる。『芸文類聚』の閨情には、多数の『玉台新詠』に収載される閨怨詩が記録されている。

閨怨・閨情の詩はもと貴族の遊戯の文学として成立し発展したから、自然、虚構の作が多い。従って、虚構を本質とする楽府作品に類別される作が多い。また、擬古の作が多い。

なお、閨情詩にしても閨怨詩にしても、作者が女性であるか男性であるかは問わない。だが閨怨詩を核とする閨怨詩は、まず貴族の遊戯文学として確立したから、作者は通常男性である。

これと関連して注意すべきは、閨情詩・閨怨詩には、男性知識人＝士の、自己の不遇への悲嘆、中国語でいう「懷才不遇」の悲しみが托されることが少なくない。

本発表では、この閨情・閨怨の表現が杜甫の詩において、どのように見られるのか、そ

の特徴を述べる。

### 一 杜詩以前の主な詩人の閨情詩製作の概況

杜甫以前の主な詩人における閨情表現の最も基本的な状況を数字で確認しておく。

	詩数	閨情詩	非閨情詩	比率
孟浩然	202	10	16	5/8
王昌齡	183	22	5	12/2.7
王維	384	19	22	4.9/5.7
李白	1003	122	88	12.2/8.8
杜甫	1457	12	87	0.8/6

・詩数は全唐詩の佚句を含まない詩の総数。杜甫詩は仇兆鰲『杜詩詳注』に拠る。

・閨情詩とは、閨情表現を主題あるいは主素材とする詩であり、非閨情詩は、閨情を主題あるいは主素材としない詩における閨情表現である。ただし、この場合の閨情とは、上記『玉台新詠』『芸文類聚』の閨情の範囲をさらに広げ、「艶」の要素を必須としない。悲哀を含め、およそ女性の情態を描く表現の全てを対象とする。そうしなければ、盛唐に始まる閨怨・閨情の広がりを見野に入れることができないからである。

・比率は、詩数に占める閨情詩、非閨情詩の数の%を示す。小数点2桁を四捨五入した。

この初歩的な調査により、以下のことがわかる。

- 1、李白と王昌齡の閨情詩への関心が突出して高く、孟浩然・王維がこれに次ぐ。杜甫詩において閨情詩は、それ以前の主な詩人に比較してきわだって少ない。
- 2、だが、非閨情詩における閨情表現は必ずしも少なくない。孟浩然・李白よりは少ないが、王昌齡よりはかなり多く、王維とほぼ同じである。

以下、まず杜甫詩の閨情詩の閨情表現の特徴を考察し、ついで非閨情詩における閨情表現の特徴を考える。

※今回は、主に閨情詩の検討を行う。

### 二、杜甫の閨情詩

杜詩詩において閨情詩とするのは、次の12首（作品番号順）である。

「月夜」0141・「新婚別」0257・「佳人」0268・「擣衣」0320・「即事」0532・「數陪李梓州泛江有女樂在諸舫戲爲艷曲二首贈李[陪章梓州][渚舫][二首贈章]・其一(上客迴空騎)」0628・同上其二(白日移歌袖)0629・「負薪行」0886・「牽牛織女」0914・「聽楊氏歌」

0981・「觀公孫大娘弟子舞劍器行[并序]」1262・「湘夫人祠」1370。これらの閨情表現の特徴を見る。

「月夜」0141

今夜鄜州月、閨中只獨看。遙憐小兒女、未解憶長安。  
香霧雲鬟濕、清輝玉臂寒。何時倚虛幌、雙照淚痕乾。

至徳元年（七五六）、長安に在って月を眺めつつ疎開先の鄜州にいる妻子を思う詩。

愛し合う二人が遙か離れた地で同じ月を見る表現は、謝莊「月賦」（『文選』卷十三）に「美人邁兮音塵闕、隔千里兮共明月」と見える。「雲鬟」は、類似の語が曹植「洛神賦」（『文選』卷十九）に「雲髻娥娥、修眉聯娟」とある。腕が細く白いのは美女の条件の一つ。例えば古詩十九首其二（『文選』卷二十九）に「娥娥紅粉粧、纖纖出細手」。費昶《華光省中夜聞城外擣衣》（《玉台新詠》卷六）に「金波正容與、玉步依砧杵。紅袖往還縈、素腕參差舉」、月光が黄金色にたゆたう時、……砧打つ真つ白い腕が次々と上がる。降り注ぐ月光の下、美女の白い腕がまぶしい。

「新婚別」0257

兔絲附蓬麻、引蔓故不長。嫁女與征夫、不如棄路旁。  
結髮為妻子、席不煖君床。暮婚晨告別、無乃太匆忙。  
君行雖不遠、守邊赴河陽。妾身未分明、何以拜姑嫜。  
父母養我時、日夜令我藏。生女有所歸、雞狗亦得將。  
君今生死地、沈痛迫中腸。誓欲隨君去、形勢反蒼黃。  
勿為新婚念、努力事戎行。婦人在軍中、兵氣恐不揚。  
自嗟貧家女、久致羅襦裳。羅襦不復施、對君洗紅妝。  
仰視百鳥飛、大小必雙翔。人事多錯沓、與君永相望。

- ・征婦怨の変形増幅版。新婚の妻の気持ちになりきって緻密に詠じている。
- ・緻密さにおいて孟浩然に似る。
- ・王嗣爽はいう「是真樂府、是三百篇興起法」（校注 p1304）。

「佳人」0268

絶代有佳人、幽居在空谷。自云良家子、零落依草木。  
關中昔喪亂、兄弟遭殺戮。官高何足論、不得收骨肉。  
世情惡衰歇、萬事隨轉燭。夫婿輕薄兒、新人美如玉。  
合昏尚知時、鴛鴦不獨宿。但見新人笑、那聞舊人哭。  
在山泉水清、出山泉水濁。侍婢賣珠迴、牽蘿補茅屋。  
摘花不插髮、采柏動盈掬。天寒翠袖薄、日暮倚修竹。

- ・棄婦の閨怨を、杜甫の生きる時代にあてはめて増幅したもの。
- ・棄婦の閨怨は『詩經』邶風「谷風」に始まり、古樂府「塘上行」「白頭吟」・古詩「上山

採藤蕪、下山逢故夫」他、杜甫の前に多数ある。

- ・朝臣から転落し、山間を流離する杜甫自身の不遇を寓意したか。

「擣衣」0320

亦知戍不返、秋至拭清砧。已近苦寒月、況經長別心。

寧辭擣衣倦、一寄塞垣深。用盡閩中力、君聽空外音。

- ・従来の擣衣の作が持つ艶なる要素がない。
- ・妻のつらく悲しい思いを「君よ聴け空外の音を」と誇張によって表現している。
- ・中唐の「擣衣」のみならず「征婦怨」の先駆けといえる。

「即事」0532

百寶裝腰帶、真珠絡臂鞵。百寶裝腰帶、真珠絡臂鞵。

笑時花近眼、舞罷錦纏頭。笑時花近眼、舞罷錦纏頭。

- ・成都の宴席で。舞妓に贈ったものだろう。趙次公曰「此篇贈女人之舞者、直道其事耳」(校注 p2541)。
- ・普通の閨情詩。

「數陪李梓州泛江有女樂在諸舫戲為艷曲二首、贈李」0628

上客迴空騎、佳人滿近船。江清歌扇底、野曠舞衣前。

玉袖凌風並、金壺隱浪偏。競將明媚色、偷眼艷陽天。

「同上其二」0629

白日移歌袖、青霄近笛牀。翠眉縈度曲、雲鬢儼成行。

立馬千山暮、迴舟一水香。使君自有婦、莫學野鴛鴦。」。

- ・明確に「艷歌」の系譜を意識する。
- ・艷曲は、『初学記』卷十五「樂部」雜樂第二に「梁・元帝《纂要》曰、古艷曲有北里・靡靡・激楚・結風・楊阿之曲」。『樂府詩集』卷六十一「雜曲歌辭」序に「艷曲興於南朝、胡音生於北俗」。
- ・「艷曲」と明示することで、自分の艶への距離を示す。

「負薪行」0886。

夔州處女髮半華、四五十無夫家。更遭喪亂嫁不售、一生抱恨長咨嗟。

土風坐男使女立、男當門戶女出入。十有八九負薪歸、賣薪得錢應供給。

至老雙鬢只垂頸、野花山葉銀釵並。筋力登危集市門、死生射利兼鹽井。

面妝首飾雜啼痕、地褊衣寒困石根。若道巫山女粗醜、何得北有昭君村。

- ・「婦病行」「孤兒行」他、庶民の悲惨・窮境を歌う古樂府の系譜。
- ・男たちが徴兵されて、嫁に行けないままに、厳しい労働の日々を強いられ老いていく女

の悲哀。

・閨怨の要素あり。「野花山葉銀釵並」「面妝首飾雜啼痕」と、美を求める女性の華やぎも点描して、一層憐れさを強く表現している。

「牽牛織女」0914

牽牛出河西、織女處其東。萬古永相望、七夕誰見同。  
神光竟難候、此事終蒙朧。颯然精靈合、何必秋遂逢。  
亭亭新妝立、龍駕具層空。世人亦為爾、祈請走兒童。  
稱家隨豐儉、白屋達公宮。膳夫翊堂殿、鳴玉淒房櫳。  
曝衣遍天下、曳月揚微風。蛛絲小人態、曲綴瓜果中。  
初筵裏重露、日出甘所終。嗟汝未嫁女、秉心鬱忡忡。  
防身動如律、竭力機杼中。雖無舅姑事、敢昧織作功。  
明明君臣契、咫尺或未容。義無棄禮法、恩始夫婦恭。  
小大有佳期、戒之在至公。方圓苟齟齬、丈夫多英雄。

・数多い「七夕」「牽牛織女」の系譜の作。

・吳瞻泰云「牛女詩……一似乎牛女竟有私会合之期矣。故公特借期兩字、以明夫婦君臣之大義」(校注 p3655)。

・「天河」0318 は、牽牛織女のことをそのまま受け入れている。

「聽楊氏歌」0981

佳人絶代歌、獨立發皓齒。滿堂慘不樂、響下清虚裏。  
江城帶素月、況乃清夜起。老夫悲暮年、壯士淚如水。  
玉杯久寂寞、金管迷宮徵。勿云聽者疲、愚智心盡死。  
古來傑出土、豈特一知己。吾聞昔秦青、傾倒天下耳。

・夔州での実際の見聞。

・妓女の華やぎへの羨望。

・不遇の自分をも、誰かが見捨てずにいてくれるはずだ。

「觀公孫大娘弟子舞劍器行[并序]」1262

大曆二年十月十九日、夔州別駕元持宅、見臨穎李十二娘舞劍器、壯其蔚跂。問其所師、曰余公孫大娘弟子也。開元三載、余尚童稚、記於郾城、觀公孫氏舞劍器・渾脫、瀏灑頓挫、獨出冠時。自高頭宜春・梨園二伎坊內人、洎外供奉舞女、曉是舞者、聖文神武皇帝初、公孫一人而已。玉貌錦衣、況余白首、今茲弟子、亦匪盛顏。既辨其由來、知波瀾莫二。撫事慷慨、聊為劍器行。昔者吳人張旭、善草書帖、數嘗於鄴縣、見公孫大娘舞西河劍器、自此草書長進、豪蕩感激、即公孫可知矣。

昔有佳人公孫氏、一舞劍器動四方。觀者如山色沮喪、天地為之久低昂。  
燿如羿射九日落、矯如羣帝驂龍翔。來如雷霆收震怒、罷如江海凝清光。  
絳脣珠袖兩寂寞、晚有弟子傳芬芳。臨穎美人在白帝、妙舞此曲神揚揚。  
與余問答既有以、感時撫事增惋傷。

先帝侍女八千人、公孫劍器初第一。五十年間似反掌、風塵瀕洞昏王室。  
梨園弟子散如煙、女樂餘姿映寒日。金粟堆南木已拱、瞿塘石城草蕭瑟。  
玳筵急管曲復終、樂極哀來月東出。老夫不知其所往、足繭荒山轉愁疾。

・公孫大娘の美麗と舞の絶妙を描写。玄宗の盛時を回憶し、今の自分の不遇を嘆じる。

・劉克莊は、白居易の「琵琶行」に似ると指摘（校注 p5315）。

・白居易「霓裳羽衣歌」もこの詩を意識して作っている。特に曲の終わる所、「罷如江海凝清光」あたり。

#### 「湘夫人祠」1370

肅肅湘妃廟、空牆碧水春。蟲書玉佩蘚、燕舞翠帷塵。

晚泊登汀樹、微馨借渚蘋。蒼梧恨不盡、染淚在叢筠。

・「湘夫人」は、梁の沈約・王僧孺に先例がある（『樂府詩集』卷57「琴曲歌辭」）。

・蒼梧で舜に逢えずに亡くなった湘夫人の恨みに、志を達することができない自己の悲哀を託す。

#### 小結

##### 一、閨情詩について

1、閨情のための閨情は、僅かである。

2、閨情表現を寓意に活用する手法は、従来を継承し、しかもその意図をかなり露わにしている。

3、閨情詩は本来貴族の遊戯であり、虚構が通常であったものが、杜甫は、閨情詩・閨情表現の非虚構化に大きく舵を切った。

4、閨情・閨怨の表現が従来よりも格段に緻密になり、具体的でリアルな表現に満ちている。

3・4の二点は、中唐の閨情・閨怨の表現の先駆である。

##### 二、非閨情詩について

非閨情詩における閨情表現を、閨情の主体によって分類すると、以下のようになる。

妓女 19、神話伝説（織女・巫山の女・湘夫人・弄玉他）15、宮女（楊貴妃・虢国婦人を含む）12、妻（あるいは老妻）9、歴史故事（卓文君・王昭君他）6、公主3、征夫の妻2、其他（庶民の老婆・棄婦・夔州の女・成都の女・野遊びの女他）21。

非閨情詩の閨情表現についても基本的特徴は閨情詩のそれと同じである。その分析結果の報告については機会を改めたい。

